

## 研究主題 特別支援学校における心理アセスメントの活用と指導の在り方

**要約：**特別支援学校では、生徒の障害の状態が一人一人異なっているため、適切な指導を行う上で心理アセスメントは必須である。北陸3県の特別支援学校高等部でもそのほとんどが心理アセスメントを行っている。しかし、指導につなぐ活用が十分ではなく、データの活用も個々の偏りや伸びを見るのにとどまっている。そこで、在籍校高等部卒業生のデータ分析から、類型編成や就労支援資料として全体に活用できる数値や傾向を導き出すとともに、事例対象生徒に心理アセスメントを活用した指導を行い、その有効性を明らかにした。

**キーワード：**特別支援学校高等部、心理アセスメント、心理検査、心理検査バッテリー、類型編成、就労支援

### I はじめに

平成19年4月1日より特別支援教育が本格的に開始した。文部科学省は、「特別支援教育の推進について」の通知で、特別支援学校の役割の拡大を指摘し、「特別支援学校教員の専門性の向上」を挙げている。また、「特別支援教育を行うための必要な取組」として第1に「実態把握」を挙げ、その必要性を述べている。特別支援学校教員への専門性の向上が求められる中、実態把握の専門的なアプローチとして心理アセスメントを活用する力が必要とされている。

### II 主題設定の理由

近年の学校教育における心理アセスメントの活用は、単なる知能水準の把握にとどまらず、効果的な指導につなぐ積極的なものになってきている。しかし、特別支援学校の現状は、まだ指導につなぐ活用が十分ではない。在籍校においても、実態把握に生育歴や障害特性の理解及び行動観察はよく行われているが、心理アセスメントの結果を指導につなぐ活用は、事例研究や自立活動の個別指導の域にとどまっている。この背景の1つとして、活用法を熟知していない教員が多いことが考えられる。私も、昨年WISC-III知能検査結果を指導にどうつなぐか分からず、途方に暮れたことがあった。生徒は何度指導しても課題を達成できず、自信を無くしていく。指導法と生徒のつまずきが合致していないことは明らかだった。しかし、検査結果の全体的にフラットなプロフィールを見ても、手立てに結びつかなかったのである。心理アセスメントの結果の分析によって、生徒の見えない実態を明らかにできたら、適切な指導の方向がつかめるのではないか。そして、生徒の苦手な面を取り上げる指導ではなく、心理アセスメントにより明らかにした生徒の「強い能力」を生かす指導を行うことで、生徒は課題を達成できるのではないかと推察した。そこで、WISC-III知能検査を含

む心理アセスメントの活用の在り方を明らかにし、それに基づく指導を実践して、生徒に課題を達成する喜びを味わわせ、自信を持たせたいと考え、本主題を設定した。

### III 研究の目的

本研究では、心理アセスメントの活用の在り方を明らかにし、それに基づく実践を通して、心理アセスメントを活用した有効な指導の在り方を実証することを目的とする。

### IV 研究の方法

- 1 Web ページや文献研究を通して心理アセスメントについてまとめる。
- 2 北陸3県の特別支援学校高等部に心理アセスメントの利用状況について調査を行い、現状と課題を明らかにする。
- 3 在籍校高等部卒業生における心理アセスメントの結果のデータ分析を行い、類型編成や就労支援に活用できる数値や傾向を導き出す。
- 4 心理アセスメントの結果を活用した指導実践を行い、その有効性を実証する。

### V 研究の内容

#### 1 心理アセスメントの理解

心理アセスメントの考え方や心理検査、有効な心理検査バッテリーについてまとめた。

心理アセスメントとは、「心理検査を通して客観的なデータを収集・分析するとともに、様々な角度から収集した情報と合わせて総合的に解釈し、生徒の状態像に迫っていくプロセス」と言える。また、結果を指導に生かすことを目的とするために、生徒の状態像の把握においては、「強い能力」と「弱い能力」の内、特に「強い能力」(肯定的な情報)を知ることにより主眼が置かれている。

心理検査とは、生徒の発達の様子や性格及び行動の特徴等の心理学的な特性を客観的に測定するため、心理測定理論に基づき、標準化された検査である。

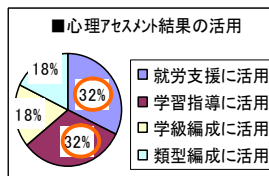
心理検査バッテリーとは、生徒を多面的に理解するために、複数の心理検査を組み合わせることを言う。本研究では、関連の高い検査として WISC-III 知能検査 (以下、WISC-III) と K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー (以下、K-ABC) を取り上げ、小貫悟が明らかにした心理検査バッテリーの有用性 (小貫 1999, pp. 85-90) に基づき、実践に生かすことにした。

## 2 北陸3県特別支援学校高等部における心理アセスメント

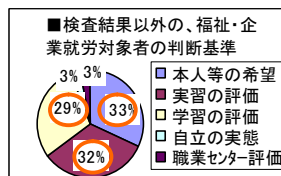
北陸3県の知的障害の特別支援学校高等部に調査を行い、心理アセスメントの利用の現状と課題を明らかにした (14校回答/16校)。活用状況では、「類型編成」と「就労支援」に着目し、分析を行った。

### □ 調査結果と考察

心理アセスメントは、93%の学校で利用されており、その結果は就労支援や学習指導によく活用されている (図表1)。また、就労支援に活用している9校について、57%の学校が「結果の数値を活用している」とあるが、福祉・企業就労対象者向けの「基準となる数値」は決まっておらず、本人の希望や実習の評価等を踏まえ、「総合的に判断して対象者決めを行っている」ことが分かった。(図表2) このように「結果のデータの活用が個々の偏りや伸びを見るのにとどまっておらず、全体に活用する数値は定まっていな



図表1 結果の活用



図表2 結果以外の判断基準

さらに全体の課題として、「心理アセスメントの活用が実態把握にとどまっておらず、指導につながり活用が十分ではない」とする学校が多かった。

そこで、心理アセスメントの結果を活用した指導の在り方を明確にするとともに、結果のデータ分析から、類型編成や就労支援資料として、全体に活用できる数値や傾向を導き出すことにした。

## 3 在籍校高等部卒業生における心理アセスメントの結果のデータ分析

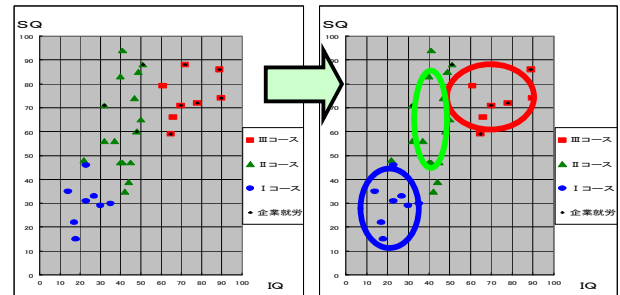
平成16, 17, 18年度の卒業生を対象に、次の1)~4)の内容についてデータ分析を行った。対象データは、次の4つである。

IQ[知能指数], SQ[社会生活指数], 領域別 SA[社会生活年齢], 学力検査得点[数国の平均点] (以下、学力)

### □ 分析・検証結果

#### 1) 3 類型生徒と企業就労生徒 (以下、企就生) の分布範囲

IQ と SQ の散布図の比較から、各コース共通のまとまり (図表3) を見だし、次の結果を得た。



図表3 H18IQとSQの散布図に見られる他年度と共通のまとまり

#### ・3 類型 (コース) 生徒と企就生の分布範囲

I コース: IQ 0~35 SQ 0~45

II コース: IQ 36~50 SQ 46~

III コース: IQ 51~90 SQ 60~90

\* 企就生の分布範囲はIIIコースに同じ

検証の結果、上記のIQの数値は、「療育手帳の判定基準」にほぼ一致し、SQの数値は、中塚善次郎らの「知能程度別プロフィール」(中塚他1997, p.191)を基に算出した重度・中度・軽度の区分値とほぼ一致した。

また、「2) II, IIIコース生徒と企就生における2つの検査値の相関関係及び学力の分布範囲」と「3) 企業就労支援におけるSQの有用性」の分析の結果、次の結論を得た。

#### 2) ・2つの検査値の相関関係

IQとSQ: やや弱く関連 IQと学力: やや強く関連

学力とSQ: 関連していない

#### ・IIIコース及び企就生の分布範囲

学力 70点~100点

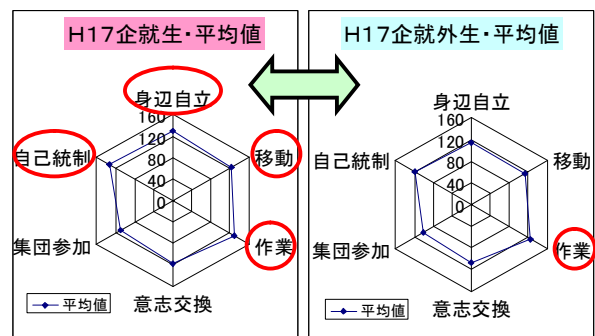
#### 3) ・企業就労支援にSQは有用である

企就生はSQがほぼ60 (IQ51) 以上必要である

\* 学力が低くても、SQがほぼ60 (IQ51) 以上あれば、企業就労の可能性はある

#### 4) 就労支援における領域別 SA 及びプロフィールの傾向

企就生とデータ値が近く、企業就労しなかった生徒 (以下、企就外生) の領域別 SA のプロフィールを比較し (図表4)、分析・検証の結果、次の結論を得た。



\* 〇 は、領域別 SA121 以上の領域

図表4 H17 企就生と企就外生における領域別 SA 平均値の比較

- ・知的障害のある生徒は、「意志交換」,「集団参加」の領域の数値が他の領域に比べて低い可能性がある
- ・企業就労を目指す生徒は、領域別 SA が 121 前後で、6 領域の均衡した発達が見られる

前者は、中塚らの『意志交換・集団参加』の領域は、認知一言語機能が最も関与する領域であるから、知的障害のある生徒はその領域の数値が低い」とする見解と一致しており、後者は、大関浩仁が「一般就労を可能にする条件」(大関 2000, p. 543) としている「SQ78 以上の生徒」と「各領域の発達格差が 4.67 未満の生徒」を踏まえた結論である。

以上を受けて、分析結果を次のようにまとめた。

□ データ分析のまとめ

- ◆就労支援に有用な SQ と学力と相関の高い IQ による区分値は、就労、学習という 2 つの指標を併せ持つ区分と言える。この活用により、就労につながる類型編成が可能になると考える。
- ◆領域別 SA 及びプロフィールの傾向は就労支援に活用できる。

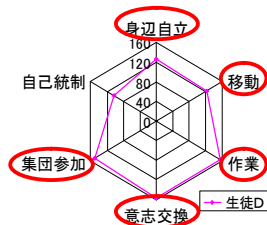
4 心理アセスメントの活用の在り方

心理アセスメントの結果の分析の仕方、結果の活用法を明らかにした。特に WISC-III の聴覚・視覚優位や群指数の読み取り、K-ABC の継次・同時処理の傾向を取り上げ、「強い能力」を指導につなぐ方法についてまとめた。

5 実践事例

1) 実践にあたって

生徒の「強い能力」を生かした指導を事例対象生徒に行い、その有効性を実証した。その際、データ分析で明らかにした就労支援に有用なデータ値を活用した。



図表 5 生徒 D の領域別 SA(月齢)

事例対象生徒は、企業就労希望の高等部 2 年生 D さん。III コース所属。新版 S-M 社会生活能力検査(以下、S-M 検査)結果では、領域別 SA の「自己統制」の領域が 121 に達しておらず、6 領域の均衡した発達に至っていない。(図表 5)

私は、昨年度から何度指導しても D さんが「時間を守れない」ことに疑問を感じていたが、「時間に合わせて計画的に行動する」能力を含む「自己統制」の領域が落ち込んでいることが明らかになった。ところで、この「時間を守る」という資質は、企業が「生活面で必要な資質」の第 3 位に挙げているものであり、企業就労を強く希望する D さんにとって必要な資質であるととらえた。そこで、これらを踏まえ、「時間を守って行動する」を目標に掲げ、この力

を育成することで、「自己統制」の領域を伸ばし、6 領域の均衡した発達を目指すべく指導を展開した。

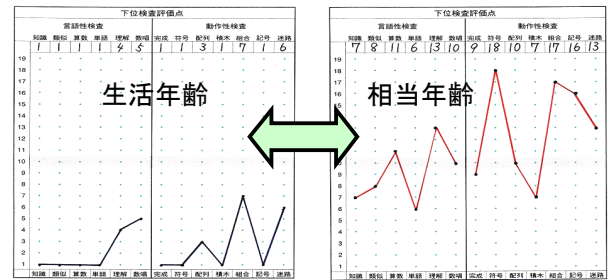
2) 心理アセスメント

生徒の「強い能力」と「弱い能力」を明らかにするため、心理アセスメントを行った。

□ 心理検査結果 (WISC-III)

- ・相当年齢によるプロフィール分析

WISC-III 結果が個人内差の読み取りにくいフラットなプロフィールだったため、相当年齢によるプロフィール分析(藤田他 2005, pp. 85-6)を行った。(図表 6)



図表 6 生徒 D・生活年齢と相当年齢のプロフィールの比較

- ・分析結果 (全検査のみ、生活年齢による分析)

- ① 全検査 IQ 42(生活年齢)
- ② 言語性 IQ 94<動作性 IQ 115
- ③ VC(言語理解)91, PO(知覚統合)105, FD(注意記憶)103, PS(処理速度)139→**PS>PO≧FD>VC**

□ K-ABC 結果との比較

- ① 認知処理過程尺度 62>全検査 IQ42
- ② 継次処理尺度=同時処理尺度
- ③ 算数 K-ABC [標準得点]66 >WISC-III [評価点]1
- ④ なぞなぞ W (Weakness)

□ 行動観察との照合

- ① よく気が付く、反応が早い、字を書くのが速い
- ② 簡単な単語の意味が分からない、長い言語指示が聞けない、状況に応じた言語操作が難しい
- ③ 周囲に注意がいき、自分のことが疎かになる
- ④ 遅刻が多い

以上から総合的に解釈し、次の結論を得た。

「強い能力」: 情報の符号化、視覚的短期記憶  
視覚優位

「弱い能力」: 単語の理解、言語概念形成  
抽象的言語概念の操作

本質と非本質の区別、時間の概念

上記の結論から指導上の留意点をまとめ、「時間」についての D さんの実態調査結果も踏まえて、次のように指導を展開した。

3) 指導の実際

指導にあっては、D さんが時間を守って行動することができるように、前述の「強い能力」を活用し、「チャレンジノートの取組」を取り入れた。また、「弱い能力」に配慮して「視覚優位」の特性を生かし、授業に具体物、視覚教材やロールプレイングを取り入れた。

□ 授業の結果（評価：よくできた◎ できた○ できなかった△）  
 ・第一次「遅れた時の相手の気持ちや不都合な状況を理解し、時間を守ることの大切さを知る」

★「ロールプレイ」の活用：遅刻をしない・した場合の比較  
 ☆生徒D：状況に合った言動を取った→状況判断 ◎

★具体物の活用：量めたタルと量めなかったタルの比較  
 ☆生徒D：遅刻して生じた

「不都合な状況」について、口頭での質問には答えられなかったが、具体物を見せると（写真1）、自分の言葉で説明できた。→状況理解 ○



写真1 具体物の活用

・第二次「5分前の時間が分かり、時計で表す」

★時計の模型の活用（写真2）

☆生徒D：時計の模型で5分前の時間を表した。→理解・表現 ◎  
 第三次「スケジュールを立て、活用する」

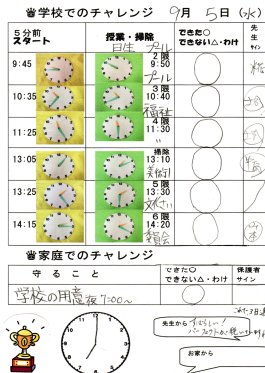


写真2 模型の活用

では、挿絵を入れたスケジュール表を使うことにより、自分で休日のスケジュールを立てることができた。このように「視覚優位」の特性を生かすことで、授業の目標はほぼ達成できた。

□ 「チャレンジノート」の取組（6～10月）の結果（図表7）

「チャレンジノート」の取組では、「画像のアナログ時計の針の形と腕時計の針の形とのマッチングにより、授業に行く時間を確認し、遅刻をせずに教室へ行く」という具体的な方法を提示した。「情報の符号化、視覚的短期記憶」の強いDさんなら、日課表に沿った、決まった針の形をとらえることは可能であろうと考えたから



図表7 チャレンジノート

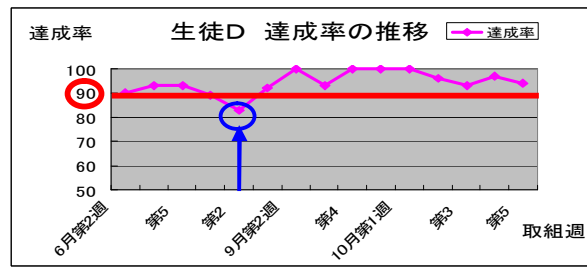
である。また、自己評価欄も作り、自分で行動を振り返る力も付けたいと考えた。さらに、家庭にも般化させたいと考え、家庭での取組欄も取り入れた。

推察どおりDさんにとって可能な課題だったとみえて、意欲的に取り組む様子が見られた。また、○の評価が増えるというプラス体験の積み重ねにより、自己肯定感が高まり、自信に繋がったようである。自己評価では少し甘い面が見られたが、他者評価と合わせることで、自分の行動を振り返ることができた。家庭では計画通りに過ごすことは難しかったが、学校ではほぼ時間を守って行動できるようになった。

4) 結果と考察

①達成率（遅刻なしで授業へ行った時数の割合）の推移

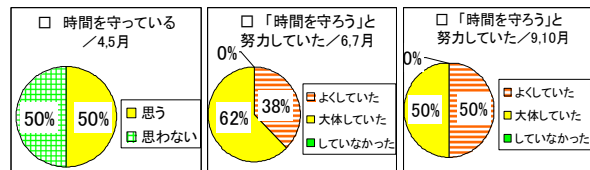
図表8から分かるように、7月の第2週に落ち込みがあるものの、Dさんがほぼ90%以上の達成率を保持していたことが分かる。



図表8 達成率の推移

②Dさんの意識・行動の変容

教科担当教師に行った調査結果（図表9）からも、Dさんがこの取組を通して、時間を守ろうとする意識を高め、よく努力していたことが分かる。



図表9 意識・行動の変容

以上の実践から、Dさんは、何度口頭で指導しても身に付かなかった「時間を守って行動する」スキルを身に付けることができた。即ち、生徒の「強い能力」を活用した指導は有効であったと言える。また、家庭での実践に結びつかなかったことで、「自己統制」の領域の数値を伸ばすことはできなかったが、伸びにつながるスキルを育成することができたと言える。今後の課題は、学校以外での般化にどうつなげるかということである。

## VI 研究のまとめ

### 1 結論

本研究を通して、次の結論を得た。

- 1) 実態把握には心理アセスメントが必要であり、心理アセスメントの結果の「強い能力」を活用した指導は有効である。
- 2) データ分析により明らかにした数値や傾向を活用することで、数値目標の設定や領域を絞った指導及び明確な評価を行うことができる。
- 3) 就労につなぐ類型編成を行うには、データ分析により明らかにしたIQとSQによる区分値の活用が有用である。

### 2 課題

心理アセスメントを活用し、結果を指導につなぐために、課題として次のことが考えられる。

- 1) 心理アセスメントの結果を個別の指導計画に反映させる。
- 2) S-M検査の「作業」領域について、質問内容を現在の企業のニーズと照らして吟味する。
- 3) IQとSQによる区分値を活用するにあたり、SQ（比例値）と近年多用されている、WISC-IIIの偏差IQを比較する方法について検討する。